

歴史散歩



じょうれんじ ほっけせつきょうとう 楠原宿浄蓮寺の法華石経塔

芸濃地域の椋本宿から伊勢別街道を北進すると、国登録有形文化財の旧明村役場庁舎に至ります。ここを左折しさらに北進すると、中ノ川を渡って古いまち並みが残る楠原宿に達します。

浄蓮寺は街道筋を少し西に入ったところにあります。元は現在の石山観音公園内にあって浄蓮坊と称し、磨崖仏を管理していました。時期は定かではありませんが、その後楠原宿に移転したと伝えられています。

浄蓮寺の本堂の向かいには法華石経塔と呼ばれる高さ2.1mの石塔があります。石塔には説話があり、塔身には建塔に至った次のようないわれが刻まれています。

江戸時代中期、楠原の明神社の裏にあるオケ谷池は堤防が弱く、楠原村の村人は堤防の保全に困難を極めていました。そこで「人柱を立てて堤防を築けば崩れない」という迷信を信じた楠原村の村人は、その頃宿場で迷子になっていた丹波出身の少女さよを人柱としたそうです。その後、さまざまな災いが頻発し、村人は大変なことをしてしまったとさよの供養をしたと伝えられています。

宝暦年間の始め頃(1750年代)、浄蓮寺の僧侶・月堂が法華経を石に一字ずつ写経し、さよを供養しようとしたのですが、成就する前に亡くなりました。文政8(1825)年7月、同じく浄蓮寺の僧侶・覚順がその志を継ぎ、写経を完成させ、供養塔を建立したといわれています。

現在、自動車の往来には、楠原宿の東を通る県道津関線が主に使われていますが、宿場の中は木造家屋が軒を連ねており、格子に昔ながらの風情を感じることができます。宿場の南端の案内板を参考に散策してみてもいいでしょうか。



浄蓮寺山門



法華石経塔

